

せたかみい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第六十九号（一日発行）
平成七年六月一日

北海の 古平風土物語（三十五）

十口平祭と『臍下丹丹田（せいかたんでん）
気△口術極意者』の海田君 三

高橋 源 五口

お祭りが済んだ後、この気合術屋が浜町中央通りに宿をとって、しばらくの間、青年たちを集めて指導していた。

彼は、夜ごとこっそりとここに通り続けていたのであった。あとでこのことがクラス中に広がり、先生の耳にも入った。ほめられたり、冷やかされたりする度に、彼は気合いもろとも早業をして見せる。
「俺は、こんなもんだ」と、鼻が高かった。

× × ×
やがて秋——十月上旬ころ、学校の大掃除の日のことであった。クラスの皆は、広い運動場の窓ガラス拭きをしていた。窓の敷居に上がって拭いていた彼が、突然、「いでい（痛い）いでい、いでい——！」と、かん

高く叫んで床に飛び降りた。手首から真っ赤な血が吹き出していた。大きな傷口がパツクリ開いていて、ひどい血であった。スワ！一大事と、飛んで来た千葉先生は大喝（だいかつ）一声、

「海田！ いだぐねえ、いだぐねえッ」

「気合術極意で頑張れッ——」と、手早く腰に下げていた手ぬぐいを引き裂いて、手首の上と上腕をぎりぎり締めつけて縛り上げ、傷口を巻いてから、浜町の井上外科医院に背負って走った。クラスの二、三人の者もそれについて走った。

背の低い先生が、大きな彼を背負って走ったので、なかなかの苦勞であったとか。手首の内側の静脈がガラスの

破片で切れていて、七針も縫うほどの大けがであった。

ガラスの破片が残っていたは大変だということで、翌日、彼は定期船・瑞広丸で余市町に出て、汽車で小樽市の名外科医・鎌倉外科医院に入院した。

二週間ほどで、すっかり元気になって帰って来た。

先生は、「さすが海田は、気

難破船と

津波のッしと

蝦夷地で難破船を見るのはたびたびのことで、今年の

二月四日にも、西蝦夷地のテウレ（手売）という所の沖で二十四人が水死した。これはテシヨ（天塩）場所の沖八、九里の所にあるテウレ、ヤングシリ（焼尻）という二つの島へ鯨取りに行くためアイヌを狩り出し、二十三人のアイヌに、松前から来た者一人が乗り組んでテウレの沖で難風に会い遭難したものである。このように変死したりすると、そのアイヌの家族や親類・縁者が大勢集まり、メッカ打ちということをする。

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

合術の極意者だ。なんにも痛がらなかつたもなあ。」と、ほめた。私たち、クラスの皆も大安心をしたのであった。

海田綱市君が入院中の十月三十一日、高等科卒業記念写真を撮ったが彼はいっしょに撮れずに、後で彼一人が円形の写真で添えてあるのは、このけがのせいであつたことを思い起こす。

メッカ打ちというのは、刀の峰で自分の額（ひたい）を打つことである。鉄で額を打つのであるから傷がついて血も出るが、これは悲しみを忘れようとするためのアイヌの習慣であるという。また、この年の五月に強い地震があつた。その時、日吉丸という松前からソウヤへ向かう交易船がオシヨロの澗に入っていたが、海上も揺れ、オシヨロの澗の回りの高い岩壁が崩れ、この土煙で浜辺にあつた運上屋やそのほかの家が見えないほどであつた。その後海水があふれ、家も流されたが、浜辺にあつた舟は残らず流されてしまった。津波である。

故郷を想う福井五年

前号 スキー場の今昔

に關連して

第十三回北海道ジュニアスキー技術選手権に挑戦した、古平スキー学校の生徒が活躍したことを報告させていただきます。

- 六位 田中 晴也君
 - 十一位 福津 圭基君
 - 二十二位 真貝 夏樹君
 - 二十七位 小田島嘉彦君
- 古平始まって以来の入賞です。

昔から十一位のことを『等外優勝』という。初参加としては抜群の成績と思う。全道から集まった秀れた選手に混じって、このような成績を得られたことに喜んでいきます。

スキーの指導員として希望が半ば達したようで、将来を大いに期待しています。なお、育ててくれた田中指導員ほか関係者にあらためてお礼を申し上げます。

鯨の豊漁で神社が急増

— 願い事が多く神様も大変 —

かつての請負人たちは神仏への信仰心が強く、神仏を敬い、神社仏閣にいろいろと寄進するほかに、自分の屋敷内に祠（ほこら）を建てて祈願をする人もいた。そして神社の建てられた年代をみると、おおよそそのころの鯨漁の盛んであったことを表していることがわかる。

元禄三年（一六九〇）から寛政年間（一八〇〇）までを見ると、北後志では十六社が建ち、忍路郡三、小樽・高島・古平・

美国・古宇の各郡二、塩谷・岩内の各郡が一となつている。その後の六十年間には二十社が建ち、岩内郡だけでも八社、古平郡では三社が建てられた。

北後志で最も古いのは当時の高島郡の稲荷神社で、元禄三年（一六九〇）に創建され、また古平郡では事代主（ことしろぬし）神社で、これは現在の港町・厳島神社であるが、宝暦元年（一七五一）今から二百四十四年前の創建である。

岡田家は、多くの場所請負人の中では珍しく十二代続いて、約二百数十年にわたって古平場所（古平領）を請け負っていたが、これは当時、古平での漁獲高が非常に多かったこともあるが、岡田家の永年の資本の蓄積が大きかったからである。

藩の財政を支えた請負人

岡田家は、多くの場所請負人の中で珍しく十二代続いて、約二百数十年にわたって古平場所（古平領）を請け負っていたが、これは当時、古平での漁獲高が非常に多かったこともあるが、岡田家の永年の資本の蓄積が大きかったからである。

交易場所としての運上屋をあずかっている請負人は、藩から命じられた取扱事務や運上金のほか、別に知行主へ賄料（まかないりよう）として、土地の産物を現物で納めなければならなかった。これを「差荷」（さしに）と言っているが、後に現金で納めるようになった。このほか場所によっては「上乗」（うわのり）と言って、藩主が藩士を請負人の船に乗せ、献上品として品物を徴収することもあったが、これも後には現金で納めるようになった。

嘉永年間（約百五十年前）、古平場所の運上金が二百六十兩の時、差荷物料として九兩二分納めていたことが記録にある。

これらのほか「納金」と言つて、藩から御用金を命じられることもたびたびあった。請負人のこれらの出費は、場所経営上必要であった蝦夷介抱（アイヌに日用品を与えることなど）や難民の救済などと共に時には莫大な額になることもあり、利益も大きかったが、資本の弱い商人ではとても請負人は勤まらなかつた。

したがって請負人は幕府がアイヌの保護を命じているのに、利益を上げるためにアイヌ人を酷使することになり、これが原因で問題が起きている。「安政二年（一八五五）、幕府の役人向山源太夫が美国郡を視察したが、これより先、当地の支配人がアイヌを昼夜を分かたず使役した上、食物も十分に与えず、そのためやせ衰え、病気に罹る者も多く、七十余軒あつた戸数も四十年ほどで僅か十三戸にまで減つてしまった。」

ということが『北海道誌料』の中に見ることが出来る。

の中に見ることが出来る。

古平場所と岡田家

遙かなる故郷の思い出

9

橘 義 春

六、サーカスの話 一 下

私は、おそろおそろそつと、「どうしてサーカスに入ったの？」と、聞いたら、「僕は、拳闘を覚えたくて入れてもらったんだ」と、明るい顔で答えてくれた。

「あーよかった。私が考えているような不幸な人ではなかったんだ。とたんにそのお兄ちゃんに親しみをおぼえて、精を出してカンガルーの草摘みを手伝った。二人で籠にいっぱい草を入れてサーカス小屋へ戻った。小屋の木戸番をしていたおじさんに、「この子は向かいの家の子で、草摘みを手伝ってくれたんだよ」と、お兄ちゃんが紹介してくれた。

「おー草摘みを手伝ってくれたのか、ありがとう。入って遊んでいきな。」と言ってくれたので無料で入ることができた。

やがてサーカスのお兄ちゃんともすっかり仲良しになり、私の家にも遊びに来るようになった。裏の納屋に吊してある魚の

干物を見て、「あれはどうするんだ」と言うので、「食べるんだ」と言ったらびっくりしたような顔をしていた。スケソ・カレイ・ホッケ・ガンジの干物はみんな鯨の建網で獲れたもので「これを叩いて食べるとうまいよ。食べるかね」と聞いたら、「うん」と言うので、カレイを石の上で叩いて皮をむき、「ど

△7日はほんな日

古平町に『空襲警報』発令

B 29 札幌・空襲などを探察

[昭和20年]

敗色も濃くなってきた昭和二十年六月二十七日正午ごろ、戦争が始まってから初めて『空襲警報』が発令され町民をびっくりさせた。二十五日、本道へ敵機が侵入してからは偵察飛行が続いていたが、今回は室蘭から札幌方面へ向けて飛行したことから発令されたものである。これより先の六月十日、小樽

うぞ……とすすめたら、おそろおそろそれを口の中に入れたが、食べているうちにその味が分かったようで、大きなカレイ一枚をペロツと平らげてしまった。毎日食べてもうまいのだから初めて食べる人にとつてはなおさらだろうと思った。まだ食べたそうだったので、干物の王様であるガンジを出した。脂ののった大きいヤツを二人で一匹平らげた。そして、木戸番のおじさんにもカレイ一枚を持って行ったら「今晚の晩酌は、つまみがうまそうなので楽しみだ」と目を細めて喜んでくれ、それ

以来私はサーカス小屋はフリーバスとなり、友達にすぐくうらやましがられたものだ。

それからいつしよに草摘みに出かけ、魚の干物を食べながら、よその町の珍しい話をいろいろと聞かせてもらった。またお兄ちゃんは、自分は将来拳闘家になるのが夢だと、目を輝かしていたが、私は子ども心にも夢をもつことのすばらしさを知ったような気がした。

サーカスの興業も終わり、お兄ちゃんとお別れの日が来た。大好きだというカレイとガンジの干物を新聞紙に包んで防波堤まで行った。弁財船にサーカスの道具や動物の積み込みは終わっていた。お兄ちゃんと木戸番のおじさんに包みを渡し、「さようなら」と言ったら、「世話になったなあ。ありがとう」

お兄ちゃんの目が少しうるんでいるように見えた。弁財船は余市をめざして出て行ったが、お兄ちゃんはいつまでも手を振っていた。

もう二度と逢うこともないであろう。だが私には充実した一週間だった。多感な少年時代のほのぼのとした思い出であり、今でも忘れることはない。

鯨の不漁で鯉の刺網

のここと



竹内 コト

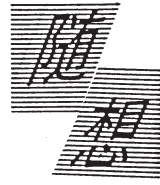
<下>

やがて、船が潤の中に入つて来ると船巻きの準備です。船の下に敷くしじきを渚まで運ぶと手の空いているおがっちゃたちがカグラサン（船の巻揚機）の棒につかまって船を巻き揚げるのです。その時、カグラサンの二下工程後にステトリというのがあるが、カグラサンで捲いたワイヤーを巻き取るのですが、これは一家総出での仕事です。

船を陸に揚げると帆柱を倒して網を下ろし、網からカレイをはずします。網は廊下（倉）へ運び、火の気も無くすき間風の入る廊下で女たちは網ときをします。それが終わると台所にあがって、後片づけや雑用に追われながら夕ごはんの支度にかかりますが、波風の荒い時などは船の帰りが遅くなるので、遅い夕食になります。

網ときが終わると、男たちはそりにカレイを積んで入船町の市場まで運んで行きますが、市場では魚の並べ方や場所、それに時間までに持って行かないと

せり値が安いということ、荷が多い時や時間に遅れそうな時などは、その後の押しをして行ったこともありましたが大変な仕事でした。ほんとうにむかしの人は、精魂かけて働き通したもので、時化の時でもないと休みなどはありませんでした。港が無いので時化になるとみんな浜に出て、船が流されないよう



昔の

祝言（げんご） 渡辺 ハツ エ

[13]

人生長くなると積もる思い出も増してくるのは当然ですが、私は来し方を思い出して、それをうまく綴ることの出来ない苛立ちを感じております。

『せたかむい』の先月号に、山口さんの奥様が、古平へお嫁入りになった時の記事が出ておりました。あれは私が五歳の時でした。

昔は、町内のどこかで祝言があるというとその噂はすぐに広

に忙しく動いていました。冬は時化が早いので特に用心しなければならなかったようです。カレイ漁の時期は寒いので、浜に風よけのむしろ小屋を建てて沖から帰って来る船を待ちます。寒いのでかいりを入れたりしまが今のよう便利なものはなく、木炭の粉なのでパチパチと火の粉が飛び散ってびっくりすることがあります。

また当時は、漁に出るから帰るまでがすべて肉体労働でしたから、沖で食べるにぎりめしは一食五合ぐらいもありました。

がって、「今日、誰々さんの家で嫁どりがあるんだってサ、見に行くべえ」と、誘い合つては見に行っていました。

祝言はみんな自宅で作っていましたから、窓の外からつま立ちをして、それこそ首を長くして、嫁どりを、見て楽しんでいました。

昔はみんな、嫁どり、と言っていました。今と違っていろいろと面倒なときもありました。

母はいつも裏返しにしたおひつぎの蓋に布を敷いた上で、上手に握っていました。櫓（ろ）を漕いでいて向かい風の時は苦勞し腹も空くそう、そんな時のために一升めしも用意します。



川崎船での仕事は大変なものだったようです。

ようです。しかし一般の家庭での祝言は、精一杯の手造りの料理と、この時ばかりは酒をドンドン出しますが、お嫁さんの衣装などはごく質素なものでした。ちなみに山口さんの祝言は、当時の一般の祝言とくらべるとそれは別格でした。何しろ鯨の大網元でしたから、それはそれは町中の大変な話題になる豪勢なものでした。私も家人に連れられて見に行きましたが、見物人も沢山いて、二階の窓にお嫁さんの角隠しをチラッと見ただけで帰ってきました。子どもの時のことですが、なぜかこのことははっきりと脳裏に残っています。

